

『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について

Sleep in *Oliver Twist*

渡部 智也

Tomoya WATANABE

1. 序

数多く存在するチャールズ・ディケンズの伝記の中で、自らも作家であるピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) によって書かれた *Dickens* は、厳密な研究書とは呼び得ないものの、ディケンズ研究家の間でも興味深い文献の一つと考えられている。アクロイドはこの中で、初期の名作『オリヴァー・ツイスト』にはディケンズの最愛の義妹メアリー・ホガース (Mary Hogarth) の死という体験が様々な形で現れていると具体例を挙げながら論じている。そしてその経験がディケンズに自らの原初体験 (少年時代、家族と離れてウォレン靴墨工場 で働かされたこと) をも思い起こさせ、作品に大きな影響を与えた、と述べた上で、続けてこう述べている。

This is not to suggest that such chapters or passages are uniquely determined by Dickens's experience of Mary Hogarth's death [...] but rather that certain aspects of Dickens's creative imagination were thereby strengthened or aroused. That is why there now develops in *Oliver Twist* a constant sense of the need for sleep, for forgetfulness, for that blessed slumber 'which ease from recent suffering alone imparts'. (Ackroyd 243)

つまりは、メアリーの死によって想像力を刺激されたディケンズは、この作品の中で繰り返し、現実を忘れさせてくれる眠りの必要性を描いていたというのである。この指摘は様々な点で注目し得る。というのも、一つには、これまであまり研究がなされていないものの、彼の言うように、この作品には眠りの要素が非常に多く含まれているからだ。

そもそもディケンズは眠りに強い関心を持っていた作家である。例えばよく知られていることだが、『ピクウィック・ペーパーズ』において、彼はジョー (the

fat boy) という、いわゆる無呼吸性症候群をわずらうキャラクターを登場させている。¹ またジョーの描写に限らず、あらゆる作品において彼は様々な睡眠障害を描いている。ジョン・コズネット (John Cosnett) はその事実を指摘するとともに、ディケンズの描写の正確さについて論じている (Cosnett 264-67)。これらの事実は、一つには彼の観察力の鋭さを示すものと言えるが、それと同時に、彼が眠りに対して非常に強い関心を抱いていたことを示す好例と言えるだろう。

またそのような先見性に加え、彼が積極的に「眠り」に関する専門的な知識を得ようとしていたことから、眠りへの関心の高さは伺える。彼の蔵書の中には当時の夢や眠りの大家、ロバート・マクニーシュ (Robert Macnish) の著書 *Philosophy of Sleep* も含まれていた。デイヴィッド・パロイシアン (David Paroissien) は、ディケンズがこの本から得た知識を実際に『オリヴァー・ツイスト』において活用していると述べている (Paroissien 101, 217)。

このようにディケンズは眠りに強い関心を持っており、作品からもその興味の強さが感じ取れる。ではディケンズが、アクロイドが述べているところの「眠りの必要性、すなわち忘れることの必要性」を『オリヴァー・ツイスト』の中で描いているのは、単にメアリー・ホガースの死の影響を反映しただけなのだろうか？ それとも何か目的があってそのような眠りを描いているのだろうか？ 本稿は、『オリヴァー・ツイスト』における眠りの描写を考察し、眠りが作品中で重要な役割を果たしていることを明らかにする。

2. 主人公オリヴァー・ツイストの眠り

『オリヴァー・ツイスト』に登場する様々な人物の中でもっとも頻繁に眠るのは、主人公のオリヴァー・ツイストである。この事実は、本作における眠りに関連する言葉の使用数にははっきりと表われている。眠りに関する言葉は、物語全体では135回使用されているが、そのうち57回がオリヴァーに関して用いられているのである。² この57回という数値は全登場人物の中で一番の値であり、二番目に多いサイクスでも18回であることを考えれば、他を圧倒する多さである。ではオリヴァーはなぜそれほど頻繁に眠るのだろうか？ この章ではオリヴァーの眠りのパターンを分析し、その意味を探ることを試みる。

オリヴァーの眠りがかくも多く現れる一つの理由としては、彼が移動するごとに眠り込むという特徴を持っていることが挙げられる。例えば物語の前半、教区役人バンプル氏によって、それまで生活してきたマン夫人の救貧院分院から救貧院へと連れて行かれたオリヴァーは、すぐに救貧院のベッドで眠り込む。

Oliver bowed low by the direction of the beadle, and was then hurried away to a large ward: where, on a rough, hard bed, he sobbed himself to sleep. What a noble illustration of the tender laws of England! They let the paupers go to sleep! (11-12)

このように、彼は最初の環境の変化を経験した直後に眠り込んでいるのである。救貧院分院を離れる際、彼は初めて ‘a sense of his loneliness in the great wide world’ (10) という孤独感に苛まれる。さらに眠り込む直前には、救貧委員会の面々の高圧的態度にショックを受けて涙を流している (‘weeping bitterly’; 11)。従ってここで彼が眠るのは、‘sobbed himself to sleep’ という表現からも明らかのように、移動にともなうこれらのショックを眠りによって忘れ、癒すためなのだ。アクロイドの言う、現実を忘れさせてくれる眠りが早速現れているのである。

同様のことは、この後救貧院から厄介払いの形でサワベリー氏の元へ奉公に出された際にも当てはまる。店に連れて来られたオリヴァーは、サワベリー夫人によって食事を与えられ、寝床へ案内される。

‘your bed’s under the counter. You don’t mind sleeping among the coffins, I suppose? But it doesn’t much matter whether you do or don’t, for you can’t sleep anywhere else. Come; don’t keep me here all night!’ (30)

棺桶と棺桶の間で寝かされる、というこの場面は非常に印象的であり、彼を受け取る過酷な生活を暗示させるが、彼はそのような場所で眠り込む³。この後眠り込むまでの間に、彼は見知らぬ場所にたった一人であるために、「酷い憂鬱感」(‘dismal feelings’; 30) に悩まされる。憂鬱感を感じた後に眠るという事実は、救貧院での眠り同様、ここでも眠りが彼に現実逃避の場を与えていることを示している。

その後、先輩徒弟ノア・クレイポールへの暴力沙汰が元で店を飛び出たオリヴァーは、ロンドンへ向かう。道中、一人ぼっちになった彼は、次のように眠り込む。‘he was cold and hungry, and more alone than he had ever felt before. Being very tired with his walk, however, he soon fell asleep and forgot his troubles’ (51)。この場面でもまた、彼がサワベリー氏の店を出るという移動、環境の変化を経験した後に眠りが現れている。そしてこの眠りによって、彼は「困難」、すなわち寒さ、飢え、孤独、そして疲労といったものを「忘れて」旅を続けることができたのである。

このように、小説の前半部分だけを見ても、オリヴァーが移動の後に眠ると

いう描写が我々の目を引く。確かに、移動の後に眠ること自体は非常に自然な行為と思われる。ましてやオリヴァーは子供である。過酷な移動、環境の変化によって、並みの大人以上に疲労を感じ、そのせいで度々眠り込むのは当然とも言えるだろう。実際、同じく旅をする子供を描いたディケンズの『骨董屋』においても似たようなパターンの眠りが見られる。例えばネルが祖父とともにロンドンを脱出したその日、一日中歩いて疲労困憊の二人は百姓屋のベッドで眠り込む (‘slept that night at a small cottage’; OCS 123)。そして次の日、再び旅を続け、親切な一家に助けてもらった後、荷馬車の上で眠りに落ちる (‘she fell asleep, for the first time that day’; OCS 126)。さらに歩いてコドリンやショートと同じ宿屋に泊まることになった際も、やはり眠っている (‘sunk into a deep slumber’; OCS 132)。このように、移動することで疲れた主人公が眠りに落ち、その結果体力気力を回復して旅を続ける、ということ自体は自然と言える。しかし『オリヴァー・ツイスト』の場合、単なる自然の行為以上のものが、その眠りの描写からは感じられる。というのも、その中にディケンズの意図が伺えるからである。このことは、オリヴァーがフェイギンのアジトに行く場面以降、強く感じられる。ロンドンで出会ったアートフル・ドジャーによってフェイギンのアジトに連れて行かれたオリヴァーは、そこで手厚い歓迎を受ける。

Oliver ate his share, and the Jew then mixed him a glass of hot gin and water: telling him he must drink it off directly, because another gentleman wanted the tumbler. Oliver did as he was desired. Immediately afterwards he felt himself gently lifted on to one of the sacks; and then he sunk into a *deep* sleep. (58; 斜体は筆者による)

フェイギンはオリヴァーに食べ物と飲み物、さらには眠る場所を与えてくれる。オリヴァーはそれらのものを全てありがたくいただき、眠りにつく。ここでも移動の直後、眠り込んでいるのである。注目すべきは、オリヴァーの眠りに関する表現(上記引用中の斜体部分)である。ここで初めて‘deep’という、眠りの質、深さを表わす形容詞が付いている。一見何ということはない表現に思われるが、これ以降度々現れる形容詞付きの眠りの場面を見ていくと、実はこのような形容詞の有無が非常に重要であることが分かる。

この後、オリヴァーはドジャーらと外出した際にスリと間違われて逮捕され、ブラウンロー氏の家で保護されることとなるが、ここでもまた彼の眠りが現れる。

The darkness and the deep stillness of the room were very solemn; as they brought into the boy's mind the thought that death had been hovering there, for many days and nights, and might yet fill it with the gloom and dread of his awful presence, he turned his face upon the pillow, and fervently prayed to Heaven.

Gradually, he fell into that *deep tranquil* sleep which ease from recent suffering alone imparts; that calm and peaceful rest which it is pain to wake from [...].

It had been bright day, for hours, when Oliver opened his eyes; he felt cheerful and happy. The crisis of the disease was safely past. He belonged to the world again. (78-79; 斜体は筆者による)

ここでオリヴァーは眠る前、ここしばらくこの部屋に「死」が立ち込めていたことを感じ取り、恐怖から、一心に神に祈りをささげている。しかしその後、「深い静かな眠り」に落ち、目覚めると、彼はその死の恐怖からは一転、‘cheerful and happy’ になっているのである。眠る前後で全てが 180 度良い方向に変わるというこの場面からは、彼がこの眠りによって肉体的精神的な癒しを得たことがはっきりと感ぜられる。さらに、‘He belonged to the world again’ との記述により、この眠りによって「彼が生き残った」という事実が強調されている。このようにオリヴァーはここでも移動後にぐっすりと眠り込み、自らの体力気力を回復するのである。

その後オリヴァーは再びフェイギン一味に捕まってしまう、アジトに連れて行かれるが、その際も彼は以下のように描かれる。

Master Bates [...] led Oliver into an adjacent kitchen, where there were two or three of the beds on which he had slept before [...]. But he was sick and weary; and he soon fell *sound* asleep. (117; 斜体は筆者による)

再びオリヴァーは、突然の大きな環境の変化にショックを受け、‘sick and weary’ な状態にあったため、すぐにぐっすりと眠り込んだのである。

そしてサイクスに連れられて強盗に入り、失敗してメイリー夫人に助けられる場面でも彼はやはり「深い眠り」に陥っている。

Stepping before them [Rose and Mrs Maylie], he [Mr Losberne] looked into the room. Motioning them to advance, he closed the door when they had entered; and gently drew back the curtains of the bed. Upon it, in lieu of the dogged, black-visaged ruffian they had expected to behold, there lay a mere child: worn with pain and exhaustion, and sunk into a *deep* sleep. (209; 斜体

は筆者による)

銃弾に傷ついたオリヴァーは、‘worn with pain and exhaustion’ と、その大いなる疲労の存在が明記されている。その疲労ゆえに彼は眠り込み、再び癒しを得て生き延びるのである。

このようにオリヴァーはフェイギンのアジトに到達以降、度々 ‘deep sleep’ のように、眠りの深さを表わす形容詞が付いた眠りに陥っている。そしてこれらの深い眠りが現れる起点となる 4 つの移動は、物語の中で非常に重要な意味を持つ移動である。何故ならこれは単なる物理的移動にとどまらず、彼の暮らす世界の変化をも意味するものだからだ。アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) が指摘しているように、この作品は ‘the contrasted relation of two worlds – the underworld of the workhouse, the funeral, the thieves’ kitchen, and the comfortable world of the Brownlows and Maylies’ (Kettle 130) というパターンから成り、オリヴァーがその二つのかけ離れた世界を行き来することで物語は進展する。従ってオリヴァーが深い眠りに落ち込む 4 つの箇所は、オリヴァーの遍歴の転換点なのである。そのような重要なタイミングにおいてはオリヴァーに深い眠りを与え、それ以外の場面においては並みの眠りを与えている、という事実から、ディケンズが意図的にオリヴァーの眠りを描いている、と考えることができるだろう。

ではこのように移動後に一貫性を持って眠りを描く目的は何か？それは、この作品の主要なテーマと密接に関わっている。ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』の第三版の序文でこの作品の目的について、‘I wished to show, in little Oliver, the principle of Good surviving through every adverse circumstance, and triumphing at last’ (xxxviii) と述べている。言い換えるならば、善を体現する存在であるオリヴァーが、悪人たちのもたらす逆境を「生き抜く」ことで初めてこの目的は達せられることになる。従って、環境の変化によってオリヴァーが更なる危機に陥るとき、絶えず眠りが現れ、彼に癒しを与えているのは、彼を生きながらえさせるというディケンズの目的を反映したもののなのである。

このことは、先ほども挙げた『骨董屋』の例と比較するとより鮮明になる。オリヴァー同様、ネルも当初は移動のたびに眠り込んでいる。しかし、オリヴァーが終始一貫して眠りを得ているのに対し、ネルの眠りは物語が進展するにつれ変質していく。例えば彼女の旅の後半、アイザック・リストが祖父だけでなく、恩人であるジャーリー夫人の金をも狙っていることを知った夜、彼女は眠ろうとする。しかし、‘But who could sleep – sleep! who could lie passively down, distracted by such terrors?’ (OCS 329) とすぐに眠れない様が描かれる。さらに、

旅の終わり近くでも疲れて眠り込むが（‘fell into a slumber’; *OCS* 348）、直後に ‘It was not like sleep’ (*OCS* 348) と描かれ、また目覚めた後は ‘Much weaker’ (*OCS* 348) と描写され、彼女が体力気力を回復させてくれる ‘sleep’ を得られなくなったことがはっきりと読者に伝えられるのである。両者の眠りの描写の違いは、作品のテーマを完遂するために、オリヴァーが逆境を生き抜かねばならぬのに対し、ネルは最終的に死なねばならない、その違いを如実に示すものと言えるのではないだろうか。オリヴァーの眠りは、作品構成上不可欠なものなのである。

3. サイクスの眠りと不眠

オリヴァーの眠りが物語のテーマと密接に関わっているというのは、既に見た通りである。同様のことが、オリヴァーと敵対する悪人たちの眠りからも伺える。ビル・サイクスはフェイギン一味の中で中心的な役割を果たす、血の気の多い悪党であるが、彼の眠りに関する言及の回数は、オリヴァーについて二番目に多い18回である。しかし、それはそのまま、彼がオリヴァーのように良い眠りを得ているということを意味するものではない。端的に言えば、オリヴァーという善を体現する存在が、眠りによって逆境を生き抜くのと正反対に、悪党サイクスは、不眠を通じて死に至るのである。

順を追って見ていこう。オリヴァーを奪還した後、サイクスはフェイギンとともに、メイリー夫人の家への押し込み強盗の計画を立てる。仕事のメンバーとしてオリヴァーを借り受けることをフェイギンに同意させ、よい気分になったサイクスはものすごい勢いで酒を飲み出し、ついには ‘he fell over the box upon the floor, and went to sleep where he fell’ (140) と眠り込む。そのオリヴァーを家に引き取り、自分の言うことを聞くようにとどやしつけた後、彼は ‘let’s have some supper, and get a snooze before starting’ (147) と述べ、実際すぐに眠り込む。そして盗みの現場に向かった後、近くのアジトで仲間のクラキット、バーニーと合流すると、そこでも再び一眠りする（‘a short nap’; 155）。さらに、強盗計画が失敗に終わった後に再び登場する際には、‘Mr William Sikes, awakening from a nap, drowsily growled forth an inquiry what time of night it was’ (277) と描かれ、彼が作戦失敗後に逃げ帰り、ナンシーにずっと看病されていたという事実が明らかになるとともに、この場面の直前まで、彼が眠っていたことが示唆される。そして彼は様子を見に来たフェイギンに対して悪態をつき、当面の生活のため、ナンシーに金を取りにやらせるが、その際には、‘I’ll lie down and have a snooze while she’s gone’ (283), ‘Mr Sikes, meanwhile, flinging himself on the bed, and composing himself to sleep away the time until the young lady’s return’

(283), ‘[Sikes] resumed the slumbers which her arrival had interrupted’ (286) と彼が眠りにつこうとする様子が繰り返し描かれる。ここでは弱りきったサイクスがこの後復活することを考えれば、オリヴァーが眠ることで逆境の中を生き抜くことができたのと同様に、サイクスもまた、眠ることで厳しい状況を生き抜いたように思われる。

これらの例を見ると、サイクスは度々眠りの癒しを得ているように思われるかもしれない。しかし、その中身はオリヴァーが得ていたものとは程遠いものである。というのも、上で挙げたサイクスの眠りの場面の大部分で、‘nap’, ‘slumber’, ‘snooze’ など、‘sleep’ 以外の、むしろ「浅い眠り」を意味する言葉が用いられているからである。⁴ ‘sleep’ が使われるのは最初の例しかなく、しかもそれは酒を飲んで眠る場面であり、酒のおかげで ‘sleep’ できた、という印象が強い。従って、彼は度々眠りを得ているように思われても、その眠りの質はオリヴァーのものとは比べて明らかに落ちるのである。

この時点ではそれでも眠りを得ているサイクスであるが、この後大きな変化を遂げることとなる。彼は、自分たちの悪事を密告しようと決意した愛人ナンシーによってアヘンを飲まされ、以下のように眠らされる。

Sikes, locking her hand in his, fell back upon the pillow: turning his eyes upon her face. They closed; opened again; closed once more; again opened. He shifted his position restlessly; and, after dozing again, and again, [...] was suddenly stricken, as it were, while in the very attitude of rising, into a deep and heavy sleep. (288)

ここではサイクスがアヘンによって徐々に深い眠りに落ちていく様が細かく描かれているが、中でも彼の眠りが初めて ‘deep and heavy sleep’ と表現されている点は注目に値する。サイクスの ‘deep sleep’ は、ナンシーがこっそり入れたアヘンによってもたらされている。つまりこの眠りは初めて彼の意思に反して起こった深い眠りであり、いわば眠りが彼を裏切った形になっているのだ。この眠りの裏切りは、彼を取り巻く状況の一大変化の前触れとなっている。回復した彼は、フェイギンからナンシーの裏切りを聞かされて激怒し、家に帰って彼女を殺害してしまう。しかし、殺人を犯して以降、彼はほとんど眠りを得られなくなる。オリヴァーの深い眠り同様、サイクスの深い眠りもまた、彼にとっての転換点に現れているのである。

ロンドンから逃げ出したサイクスはその道中、眠ろうとするが、すぐに起き上がって歩き出す。‘he laid himself down under a hedge, and slept. Soon he was up again, and away’ (349–50)。ここで ‘slept’ の直後に ‘soon’ という語が入ら

れていることで、彼の眠りの短さが強調されている。その後歩き続け、疲れ果ててしまうものの、それでも何とか静かな村にある小さなパブにたどり着いたサイクスはそこに入り込み、疲れからか眠りかける。ところが突然現れた男によって、その眠りを覚まされてしまう。‘The robber [. . .] had almost dropped asleep, when he was half wakened by the noisy entrance of a newcomer’ (350–51)。サイクスにとってさらに悪いことに、この男はしみのついたサイクスの帽子を取り上げ、自分のしみ取り薬の宣伝を始める。「たとえこのしみが血でも」という台詞に恐れたサイクスは狂乱して暴れ、パブを飛び出ることとなる。この場面でサイクスが自らの殺人を思い出させられ、恐怖が蘇っているのは明らかだろう。眠れないことで恐怖が蘇る、というこの場面には、眠りによって「忘れる」という恩恵をサイクスが失っていることが如実に表われている。そして上記の ‘almost dropped asleep, when’ という表現からは、もしこの男さえ存在しなければ、サイクスは眠って精神と肉体を回復させることができた、ということが感じられ、ディケンズはこの男を登場させることで、意図的にサイクスを不眠状態にしようとしている、とさえ感じられるのである。

サイクスの不眠状態はこの後も続く。一度彼は、‘a long, but broken and uneasy sleep’ (355) を得るものの、‘uneasy’, ‘broken’ という語が示すように、彼を休める機能は果たせていない。そのような苦しい精神状態の中で、彼は「ロンドンに戻るという自暴自棄な決断’ (‘the desperate resolution of going back to London’; 355) を下し、そこで大捕り物を演じた後、ナンシーの目の亡霊におびえ、足を踏み外した拍子に首を吊って死んでしまう。いわば、眠りの裏切りとその後の不眠から全てが悪い方向に進み、死に至るのである。間接的に、不眠が彼の死を招いた、とも言えるのではないだろうか。まさにオリヴァーとは正反対のパターンがここに見受けられる。

この箇所以外でも、逃走中のサイクスの不眠はたびたび言及されている。語り手はサイクスがナンシーの目の亡霊を恐れだした際、次のように述べている。

Let no man talk of murderers escaping justice, and hint that Providence must sleep. There were twenty score of violent deaths in one long minute of that agony of fear. (353)

ここで、比喩として ‘sleep’ が使われている点は注目に値する。この前半部分は、ディケンズの殺人者に対する激しい批判であるとともに、サイクスの不眠を強く思い起こさせる表現と言える。

一方この箇所の後半部分に関して、パロイシアンはマクベスがバンクォーの

亡霊を見た直後に述べる台詞との類似を指摘している。⁵ また逃走中に、恐怖を振り払おうとサイクスが消火活動に精を出す場面が描かれるが、その際にも、‘he bore a charmed life’ (355) と、『マクベス』を想起させる表現が使われている。さらにフィリップ・コリンズ (Philip Collins) は、不眠になり、そしてナンシーの目の亡霊に取り付かれたサイクスについて、‘Sikes [. . .] recalls Macbeth’s ‘terrible dreams’ and his vision of Banquo’s ghost’ (Collins 299) であると述べ、サイクスとマクベスの類似を指摘している。前述の表現における ‘sleep’ の意図的と思える使い方と、マクベスとサイクスの類似は、『マクベス』の台詞、‘Macbeth does murder Sleep’ (2.2.36) を喚起させ、それだけ一層彼の不眠状態と苦しみを強調していると言えよう。

サイクスのように、殺人者が不眠になる、ということ自体は、ディケンズ作品には比較的によく見られるパターンである。例えば、『バーナビー・ラッジ』におけるラッジ、『マーティン・チャズルウィット』のジョーナス・チャズルウィット、そして『我らが共通の友』のブラッドリー・ヘッドストーンなどがそれに当てはまる。しかし、彼らとサイクスには大きな違いがある。それは、サイクスは殺人を行う前、浅いながらも度々眠りを得ていたのに対し、それ以外の殺人者は、最初から眠りを得る描写がほとんどなされていない、ということである。例えばラッジは物語が始まった時点で既に殺人を犯していることもあり、最初から眠りに見放された存在として描かれる (‘to have nothing in common with the slumbering world around, not even sleep, Heaven’s gift to all its creatures’; BR 140)。ジョーナスも、殺人直前に殺人を示唆する夢を見るものの、自らを ‘light sleeper’ (MC 559) と呼ぶように、眠る場面はほとんど描かれていない。ブラッドリーも同様である。従って他の殺人者と異なり、サイクスからは、自らを愛する無実の女性を殺す、という極悪非道な行為を行うことで悪の階段を登りつめ、それに伴い不眠が悪化した、という事実が強く感じられる。

このように、一貫して善の原理を体現し、絶えず眠り込むオリヴァーとは対照的に、悪人サイクスは良い眠りを得られず、挙句の果ては殺人者となることでより厳しい不眠へと陥り、死に至る様が描かれているのである。善と悪の対立、そして善の勝利 (悪の敗北) というテーマを、ディケンズが眠りによって巧みに描き分けている、その一例と言えるだろう。

4. 眠らぬフェイギン

本稿ではこれまで純真無垢なオリヴァーの眠りと、殺人者サイクスの眠り (及び不眠) について論じてきた。しかしこの小説にはもう一人、眠りに関して論じる上で扱うべき重要な人物がいる。すなわち、悪魔的な人物、フェイギ

ンである。この物語において、全ての悪を陰で操っているのはフェイギンである。彼にとっては、サイクスさえも自らの目的を達成するための道具の一つに過ぎない。彼は自分自身のことを、‘me, who with six words, can strangle Sikes as surely as if I had his bull’s throat between my fingers now’ (183) と述べ、自分が悪の世界でサイクスよりもはるかに上に位置する存在であることを示唆している。さらに、ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』を書き終えようとしていた時、フェイギンについて、親友のジョン・フォスター (John Forster) に、‘such an out and outer that I [Dickens] don’t know what to make of him.’ (Forster 87) とこぼしている。これらの事を考えれば、フェイギンの邪悪さはサイクスのそれをはるかに凌ぎ、また彼こそがこの作品における悪を象徴する存在である、と言えるだろう。

そのように邪悪なフェイギンの眠りは、オリヴァーやサイクスの眠りとは全く異なる点で非常に特徴的である。すなわち、オリヴァーやサイクスと異なり、フェイギンは作品中で全く眠る場面が描かれぬ人物なのである。ディケンズはこの、フェイギンが少しも眠らないという事実を、眠っている他の登場人物と眠らないフェイギンとの対比によって強調している。しかも、彼はただ眠らないだけでなく、別の人物の眠りを巧みに利用し、自分に有利になるように取り計らっているのだ。以下、具体例を見てみよう。サイクスと押し込み強盗の計画を立てた際、上機嫌になったサイクスは酒を飲み、眠り込む。それに対し、フェイギンは眠るそぶりなど少しも見せず、さらにはサイクスが眠っている隙にこっそりと彼を蹴っ飛ばし (‘bestowing a sly kick upon the prostrate form of Mr Sikes’; 141)、日ごろの恨みを多少なりとも晴らす。その後フェイギンは、その強盗計画が失敗したと聞いてやってきたマンクスと、アジトで内密の話をしようとする。その時アジトにはクラキットと子供たちがいたが、‘Toby Crackit was asleep in the back-room below, and that the boys were in the front one’ (186) と記述されるように、彼らはぐっすり眠っており、そのおかげで目ざとい彼らに盗み聞きされることなく、マンクスと秘密の会談を行っている。極めつけはナンシーの裏切りが判明した直後である。

It was nearly two hours before day-break; that time which in the autumn of the year, may be truly called the dead of night; when the streets are silent and deserted; when even sounds appear to slumber, and profligacy and riot have staggered home to dream; it was at this still and silent hour, that Fagin sat watching in his old lair, with face so distorted and pale, and eyes so red and bloodshot, that he looked less like a man, than like some hideous phantom,

moist from the grave, and worried by an evil spirit. (342)

この描写では、フェイギンが他の人々が皆寝静まったような時刻に一人、ナンシーの裏切りに対処する計画を練っている際の恐ろしい様子が描かれている。町の様子を描くのに ‘slumber’, ‘dream’ といった語が比喩的に使用されていることが、逆に彼だけが眠っていない、という事実を際立たせていると言えるだろう。その後やってきたサイクスに、彼はノアの口を通してナンシーの裏切りを伝え、サイクスにナンシーをどうにかするようけしかける。この場面でノアは、ナンシーを見張ってきた疲れのため、眠っているのである。フェイギンがノアを起こしてナンシーのことを語らせようとする際、繰り返し、‘sleeper’, ‘sleepy’ といった単語が使用されるが、それはノアの睡眠状態を示すとともに、少しも眠らないフェイギンの不気味さを強く印象づけているのである。

さらにここでも彼はノアの眠りを巧みに利用している。

‘A gentleman and a lady that she had gone to of her own accord before, who asked her to give up all her pals, and Monks first, which she did – and to describe him, which she did – and to tell her what house it was that we meet at, and go to, which she did – and where it could be best watched from, which she did – and what time the people went there, which she did. She did all this. She told it all every word without a threat, without a murmur – she did – did she not?’ cried Fagin, half mad with fury. (345–46)

フェイギンはナンシーの裏切りの内容を1つ1つ列挙し、サイクスの怒りを掻き立てる。この後、その場面を実際に見てきた、というノアが眠そうに、‘That’s just what it was!’ (346) と言った事で、フェイギンの話の信憑性は高められ、そのおかげでサイクスの怒りはより一層高まることとなる。しかし、実際にナンシーがやったことと、ここでフェイギンが述べている彼女の行為との間には、実は大きな開きがある。まずフェイギンは、ナンシーが仲間全員を売ると言われた、と述べているが、実際のところブラウンロー氏は、ただマンクスを引き渡すようにと言っただけである (‘put Monks into my hands, and leave him to me to deal with’; 339)。またナンシー自身もかろうじてマンクスを引き渡すことにのみ同意しただけで、特に「もしマンクスが何も吐かなければフェイギンを引き渡してくれ」と頼まれた際には、‘I will never do it!’ (338) と述べて、かたくなに拒絶しているのである。この事実を考えれば、彼女が「不平もこぼさずに」(‘without a murmur’) 仲間を売った、というのが事実ではないことは明

らかだろ。このようにフェイギンがここで述べるナンシーの裏切り行為と、実際にナンシーが行った事との間には大きな差異がある。そしてこのような違いが生まれた理由は、フェイギンが意図的に情報を操作したためなのである。彼の目的は、邪魔になってきたサイクスと裏切り者ナンシーを同時に処分することであり、そのためにはサイクスにナンシーを殺させるのがもっとも効率的な方法である。しかし、もしノアに見てきた通りのことを話させた場合、ナンシーが彼らを守ろうとしていたという、彼にとっては余計な事実についてまで言及してしまい、サイクスの決意を鈍らせる可能性が否定できない。事前にノアに、ナンシーを実際以上に悪く言うよう頼んでおくという手もあるが、それはノアの信用の置けない性質を考えれば危険で使えない。そこで、フェイギンはノアの寝ぼけた状態を利用して、実際に見てきたことについて彼に語らせるのではなく、自分で脚色した彼女の行為を列挙し、寝ぼけたノアにはただその話に同意させることで、ナンシーの裏切り行為を自分に都合の良い形で誇張してサイクスに伝え、彼の怒りを頂点にまで掻き立てることに成功したのである。このようにフェイギンは、自分は眠らずに眠る他者の眠りを利用し、自らの地位を保つ悪魔的な人物なのである。

ところが興味深いことに、このように決して眠らないフェイギンが、最後の最後ですがりつくのは、その「眠り」なのである。全てが明らかになった後、フェイギンは捕まり、死刑判決を受ける。死の恐怖に恐れおののくフェイギンは、ついに頭がおかしくなる。しかし獄中の彼は、‘awake, but dreaming’ (392) と描かれるように、頭が朦朧としているものの、眠りを得ることはできない。これは、この場面のモデルとも言える、『ボズのスケッチ』の中に収められた ‘A Visit to Newgate’ における死刑囚の描写とコントラストをなす。この死刑囚は、少なくとも疲労困憊で眠り込み、牢獄を脱出する夢を見る。しかし、フェイギンはそれすらもできないのである。‘A Visit to Newgate’ における囚人が、眠りによって一時的とはいえ、死に直面しているという現実から目をそむけることができたのに対し、フェイギンはそれすらできない。これはサイクス同様、フェイギンが「眠りによって辛い現実を忘れる」という眠りの効能を失っていることをはっきりと示している。それまでは不眠から利益を得てきた人物が、逆にその不眠に苦しめられるのである。そのような状態で、彼はオリヴァーとブラウンロー氏の訪問を受ける。マンクスから渡された書類のありかを聞かれたフェイギンは、オリヴァーになら話す、と述べ、オリヴァーに打ち明け、さらにこっそり次のように告げる。‘Say I’ve gone to sleep—they’ll believe you. You can get me out, if you take me so. Now then, now then!’ (394)。フェイギンはここで、「自分が眠ってしまったことにしてくれれば、外に出られる」と述べてい

るが、少し考えればこの台詞が非論理的であるのは明らかだろ。確かに、フェイギンの頭がおかしくなっているということをより具体的に示すための台詞とも考えられる。しかし、これまで全く眠らなかった彼が初めて自らの「眠り」について言及した、という点を考えれば、もっと重要な意味が込められていると考えるのが自然だろ。この後あっさり看守に捕まった際に、彼が必死に暴れ叫んでいるように (‘He struggled with the power of desperation, for an instant; and, then sent up cry upon cry’; 395)、ここで彼は生き延びようと懸命にあがいていると思われる。その「生」への最後のあがきの際に、‘sleep’ という言葉を使って逃げ、生き延びようとしたというのは、彼が本能的に「眠っている、といえれば命が助かる」という考えを持ったことを意味しているのではないだろうか。最後の最後になって、彼はこれまで自らがよりどころとしてきた不眠ではなく、オリヴァーを助けてきた眠りに頼ったのである。言い換えれば、この場面では、眠らないことで他者を支配し、悪の世界に君臨してきたフェイギンが、眠ることで逆境を生き抜いてきたオリヴァーに対し、敗北を宣言したのに他ならない。つまりこの台詞は、悪に対する善の最終的な勝利を象徴的に示すものなのである。

5. 結び

本稿で考察してきたように、ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』において眠りを用いてオリヴァーを生きながらえさせ、一方でサイクスを不眠に陥れることで死に追いやり、「眠らない」フェイギンには最後の最後で、それまで得たことのない眠りを求めさせて、悪の敗北を強調している。このように眠りと不眠を巧みに使い分けることで、ディケンズは善と悪の対立、そして善の最終的勝利、という物語の主要なテーマを鮮やかに表現しているのである。

注

* 本稿は、2006年10月7日に東北大学で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部総会において行った研究発表「*Oliver Twist* における「眠り」について」に加筆、修正を施したものである。なお、『オリヴァー・ツイスト』からの引用は全て Steven Connor 編集の、Everyman Paperback edition (London: Dent, 1994) によるものである。括弧内にはそのページ番号を挿入した。また、それ以外のディケンズ作品からの引用には、ページ番号に加え、作品名の省略形を記した。省略形は以下のとおり。BR: *Barnaby Rudge*, OCS: *The Old Curiosity Shop*, MC: *Martin Chuzzlewit*。

1 ジョーは元々単にこっけいな人物と考えられていたが、1956年にC・シドニー・バーウェル (C. Sidney Burwell) らの研究によって、彼が『ピクウィック症候群』と呼ばれる、一種の「無呼吸性症候群」という睡眠障害に冒されていることが明らかになった。彼らは医学的な見地からジョーの眠りの描写を考察し、肥満と眠

気、赤血球増加と大食といった事実を結びつけたのである (Burwell 811-18)。従ってディケンズは、医学的な解明が行われるおよそ1世紀以上も昔の段階で、そのような病気の存在に気がついていたのである。

- 2 ここで言うところの「眠り関連語」とは、‘sleep’, ‘slumber’, ‘doze’, ‘nap’, ‘dream’ といった言葉である。なお、例えば ‘dream’ には「眠り」と関わる意味での「夢」以外に、「将来の夢」というような意味として使われる場合もあるが、そのような事例はすべて除外した。また今回の調査には、*The Victorian Literary Studies Archive* 内の Hyper-Concordance を使用した。以下にその URL を記す (<http://www.victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/>)。
- 3 パロイシアンによると、実際に多くの教区の奉公人たちは不潔で悪臭の漂う地面で寝かされ、当時酷く虐待を受けていたとのことである (Paroissien 72-73)。従ってこの棺桶の間に寝かされるという描写は、オリヴァーが奉公人になったからといって全く彼の置かれた状況が改善されたのではなく、彼の命はまだ危険にさらされている、という事実を強く感じさせる。
- 4 *The Oxford English Dictionary* によれば、‘nap’ は ‘a short or light sleep’, ‘slumber’ は ‘a light or short sleep’, ‘snooze’ は ‘a sleep, a nap’ と説明されており、これらはいずれも普通の ‘sleep’ よりも浅い眠りのイメージを内包する言葉である。
- 5 パロイシアンはこの場面が『マクベス』の ‘but now they rise again./ With twenty mortal murders on their crowns’ (Shakespeare 3.4.80-81) を思わせる、と述べている (Paroissien 264)。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Burwell, C. Sidney, Eugene D. Robin, Robert D. Whaley, and Albert G. Bickelmann. “Extreme Obesity Associated with Alveolar Hypoventilation: A Pickwickian Syndrome.” *American Journal of Medicine* 21 (1956): 811-18.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. 3rd ed. London: Macmillan; New York: St. Martin’s, 1994.
- Cosnett, J. E. “Charles Dickens: Observer of Sleep and Its Disorders.” *Sleep* 15.3 (1992): 264-67.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Ed. Donald Hawes. London: Dent, 1996.
- . *Martin Chuzzlewit*. Ed. Patricia Ingham. Harmondsworth: Penguin, 2004.
- . *Oliver Twist*. Ed. Steven Connor. London: Dent, 1994.
- . *The Old Curiosity Shop*. Ed. Paul Schlicke. London: Dent, 1995.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol.1. London: Dent, 1948.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel*. Vol. 1. London: Gainsborough, 1951.
- Paroissien, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1992.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. London: Methuen, 1953.

フランス革命期を描く小説の歴史性 — 『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を中心に —

Historicity of the French Revolution Novels:

A Tale of Two Cities and La Vendée

矢次 綾

Aya YATSUGI

フランス革命は人々の歴史意識を呼び覚まし、¹内外の思想に影響しただけではなく、19世紀に隆盛を極めた歴史小説にも恰好の題材を提供した。その証拠に、英仏の主要作家が第一共和制崩壊までのフランス革命期を題材に描いた小説として、バルザックの『ふくろう党』(*Les Chouans ou la Bretagne en 1799*, 1837)、トロロプの『ラ・ヴァンデ』(*La Vendée*, 1850)、ディケンズの『二都物語』(1859)、ユゴーの『九十三年』(*Quatre-vingt-treize*, 1874)などを挙げることができる。革命期の人々が「友愛か死か」という二者択一を共和主義者によって強要されたように、²これらの小説の主要人物は共通して、混乱の時代を背景に、生死を賭けた選択を迫られている。もっとも、上に挙げた英文学の二作は仏文学の二作よりも歴史小説としての評価が従来から低い。とりわけ『ラ・ヴァンデ』はトロロプの「最低の作品」(Hall 112)と見なされ、ルカーチの『歴史小説論』、アンドリュウ・サンダーズの『ヴィクトリア朝の歴史小説』、ハリー・ショアの『歴史フィクションの形態 — スコットとその後継者たち』といった歴史小説論では言及されてさえいない。それは、これらの二作において人物の選択と革命期を象徴する思想との関わりが仏文学の二作よりも希薄であること、そして、各々の作者がおそらく無意識的に19世紀のイギリスの状況を過剰に反映させている箇所が見られることなどによると考えられる。20世紀末にヒストリオグラフィック・メタフィクションが一潮流を創るなど、過去の歴史的な出来事 — それが起こった日付と場所と共に一般的に認識されている過去の出来事 — を扱う小説が多様化した現在において、歴史小説を論じるのに、ルカーチが課した「個人の運命と歴史の一般的な運動との有機的な繋がりを描出する」という命題を